
めろん。

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めろん。

【Nコード】

N6498C

【作者名】

遼

【あらすじ】

裕福な家庭環境に育った兄妹にも、争いは存在する。例えば名前を呼ぶ順番だったりするのだけれど、その最たるものが――メロンだ。メロンを取り合うと止まらない。双子の姉妹も、普段は大人しい兄でもその魅力には逆らえない。ある朝、メロンが食卓に並んだ。そんな話。

例えばここに、大きなメロンが一つあったとする。“ここ”をどう定義するかは一先ずおいといて、兎も角もここに大きなメロンが一つだけ置いてあるのだ。

例えば僕には、二人の妹がいる。二人共フルーツは大の好物で、朝食に時折出張るメロンなんかに目を輝かせ、そして奪い合う。双子——一卵性双生児という運命の元に生まれてきた彼女達は、そんな時決まってその運命を嘆くのだ。「どうして私達は似ているの」と、ただ一人似ることのなかった僕を責めるのだ。

例えば僕は、メロンが好きだ。結局、僕らは似ているのだ。

めろん。

本も子もない、という言葉を知っているだろうか。少なくとも小学校程度の国語を学んでいれば、知らない人を探す方が難しいだろうと思う。元々は、元金も利息もない、という意味から由来しているらしいが、とりあえずのところ失敗して全てを失うことを指している。

僕はこの言葉が大好きだ。よく「変人」と揶揄されるが、これほどの絶望を僕は知らないから、恐らくそれに惹かれるのだと思う。

絶望——望みのたえること。希望を全く失うこと。広辞苑より。

素晴らしいじゃないか。二人の可愛い妹と優しい両親、そして裕福な家庭環境と、周囲に持て囃される才媛の数々。それらを全て併せ持った僕は、その言葉に酷く惹かれるのだ。知りたいと願う。

知ったとして？ もちろん、這い上がるのさ。

考えるだけでぞくぞくする。全てを失ったはずの僕が全てを得て、全てが僕を祝福してくれたとしたら、その時僕は人生のアクメを体験するのだ。絶頂期——かつてタレスが四十半ばで味わったそれを、若干十七という僕が淘汰する。考えただけで、身震いが止まらない。

とは言っても、特別何かをしているわけじゃない。絶望など、自分から進んで体験するものじゃない。自分から望んで味わった絶望など、絶望ではないじゃないか。

さてさて、今日の妹達は、どんな失望を僕に与えてくれるだろう？

僕の朝は、携帯電話に内蔵されたアラーム機能の賑やかな合奏によって訪れる。交響曲第九番『歓喜の歌』——ベートーヴェンが生み出した音の芸術、それによって僕は覚醒するのだ。よって、機嫌の悪い目覚めを体験したことは、今までに一度もない。当然だろう、歓喜によって僕は睡魔を討伐するのだから。

必要以上の思考は脳の活動を著しく低下させる。アラームを止めると、部屋の隅に掛かったハンガーから制服を下ろし、それを着込む。擦れた僕に相応しく萎びれたそれは、妹達の体液に塗れて色褪せてしまっている。体液即ち唾液、人体が生み出す最初の消化液である。

この世界の寒気は身体に優しくない。それによってクリアになった思考を妹達の体調に傾け、僕は自室を後にした。

妹達の部屋は、僕の直前に位置している。必要以上に広いこの廊

下は、僕らの距離をより長いものにしてしまった——もつとも、たったの五メートルではあるけれど。

ノックを二度、返答はない。開いたドアから漏れ出たのは、昨日から点けっぱなしであるう蛍光灯の白い灯りだ。部屋の真ん中にあるダブルベッドには、腹を出して眠る愛しき妹達——その手にゲームのコントローラーを握っている辺りは、ちつとも愛しくはないけれど。

起きると声を張り上げたが、返ってきたのは小さな呻き声が二つだけだ。

「うー」「なー」

ぎ。それにそう付け加えてから、僕は妹達の眠るベッドに歩み寄った。

見下ろす先には、同じ顔した女の子が二人。雪面など取るに足らないくらい美しい肌と、全てにおいて整った口や鼻、そして今は見るこのできない瞳に捉われたら、僕などという男は逃げ出すこともできなくなってしまう。

同じに見える。でも、少し考えれば全く違うことに気付く。例えばその肌の輝度は妹が僅かに高いし、眉は姉が一ミクロンほど釣り気味で、鼻にかかった声なんかは姉特有に間違いはなかった。もつとも、家族以外の誰が聞いても、その違いに気付くことはないだろうけど。

「月、空、起きな」

「ういー……月はまだ眠いのです」

「なう……空もまだ眠いのです」

全くもって瓜二つ。瓜の類は僕も大好物だし、割れてしまったそれには甚く心惹かれる。二人共、僕の為に生まれたのではないかと思えるくらいに可愛かった。

「月には拳骨、空にはしつぺ。さて、それとも逆がいいかな？」

「ういー、起きるのですっ！」

「なうっ！ 空は両方嫌いなのですっ！」

慌ててコントローラーを手放し、左手で頭を押さえ、右手で右手を——二人は錯乱した。

「ういつ、空、大変、腕が守れないのです!」

「月、大変なのです! このままでは空と月、しっぺの餌食なのです!」

「空! 月の名前を最初にするのです!」

「なう! 月は妹だから、後でいいのです!」

「生意気なのです!」

「やるのですかあつ!」

ベッドに寝そべったまま互いに掴みかかろうとした二人を、僕の手が押さえた。お腹に添えられた僕の手がくすぐったいのか、二人は一度に怒りを忘れてしまったようだ。

「せい、放すのです」

「大人しくなつたのです」

せい——星と呼ばれた男こそが僕だ。

潤んだ瞳に逆らえない僕は、仕方なくその手を離れた。上半身をのろのろと起こした二人の動きは寸分の狂いもなく揃い、その声も完全に合致している。

「おはようなのです」「おはようなのです」

「星、おはようのちゅーをのです」「星、おはようのちゅーをのです」

この場合、僕の行動として正しいのはどれだろう?

一、月の頬から先に口付ける。

二、空の頬から先に口付ける。

正解——該当なし。正しい答えは、どちらにもキスはしない、だ。どちらを先にしたって喧嘩になり、その拳僕が親に告げ口されてしまう。「空を蔑ろにした」とか「月を疎んだ」とか、そのつもりは欠片もないというのに、双子という「形式」をこの上なく利用してみせるのだ。

背を向けて手を振る僕に不平を零した二人は、同時にベッドから

足を下ろした。左が月で、右が空。ドアを閉めても、それだけはわかる。

姉妹を起こすという大役をこなした僕は、ようやくリビングへ入ることを許される。そこにはコーヒ―を片手に談笑する両親の姿――とても、よく似ている。

「おはようございます、お父様、お母様」

「おはよう、星。――紅茶を」

「はい。――ミルクティーでよろしかったですね？」

母の侍女のような態度をクラスメイトに揶揄されたこともあったが、もう慣れて久しい。付き従うことしか知らずとも、付き従うことを知っている。長いものに巻かれるという能力は、この世にあつて何よりも役に立つものなのだ。母を軽蔑などしていない――この社会に何より適応してみせた彼女には、敬意すら払っているつもりだ。

「空と月は、目を覚ましたか？」

「はい。喧嘩になりましたが、いつも通りです」

「全く……もう中学生だというに、いつになったら大人になってくれるやら」

当年とって十三になる二人は、いつまで経っても子供らしさが抜けることはなかった。それは口調であり言動であり、また態度でも性格でもあり、学力や身体能力という点を除いては、全てにおいて子供だった。無邪気といえば聞こえはいいが、言い換えればただ幼稚なだけだ。

愛しい子供達。だから僕は、彼女達が好きなんだ。

紅茶と一緒にリビングへ入場した姉妹を、僕と父は揃って笑顔で迎えた。この笑顔を見るにつけ思う――この家での一番の権力者は、恐らくこの二人なんだろう。

「おはようなのです。お父様、月は元気なのです」

「おはようなのです。空も元気なのです」

尊大な声でそれに返答をした父の顔は、それでいて緩みきってい

るのだから救いようがない。この子達がいつまでも幼いままなのは、恐らく躰が正しく為されていなかったからだろう。

「星、席を移るのです」

「月と空で星を挟むのです」

「月！ 空を最初に呼ぶのです！」

「空はお姉ちゃんなんだから、妹に至少くらい譲歩するべきなのです！」

「こら、二人共。ここは食事をするところだぞ。星に拳骨落とされても、父さんは助けてやれないんだ」

その声によりやく大人しくなった二人は、改めて僕に視線を向けた。糾弾するようなその視線に僕が逆らえるはずもなく、仕方なく三つ並んだ椅子の真ん中へ移動するのだった。月を左に、空を右に従えた僕を、父は羨望の眼差しで見つめてくる。

こうまで溺愛される娘もそうはいないだろう。あのダブルベッドだって、二人のおねだりによつて父さんが買い与えたものだ。少なくとも百万は下らない品物だというに、何の躊躇いもなくそうしてしまった。

「お母様、ミルクティーを」

「星と同じでなきや駄目なのです」

「はい。――星さん、しばらくお待ちくださいな」

恭しく一礼をした母がキッチンへ下がると同時に、姉妹は正しく同時に僕の腕に縋りついた。小さな彼女達は、広いテーブルを有効的に使おうなどという気持ちなど欠片も抱いてはいないのだ。まだ幼いから、ただ一人の兄に縋りたくなる気持ちも、わからなくはないけれど。

「うい、月はこの時間が一番好きなのです」

「なう。同意なのです」

「そりゃ……僕の帰りが遅いのは認めるけど、そんな風に見ないでおくれよ」

爛漫な笑顔で視線を投げかけてくる。ただ一つの意味を持つとい

う点でとても純粋な視線——もっと早く帰ってくるのですと、誰が言わずとも理解できた。

「星は勉強などしなくても十分できる子なのです」

「星は部活などしなくても十分バイタリティのある子なのです」

「参ったなあ……」

反論などできるはずもない。勉強ができないと言ったところで僕の成績がそれを否定するし、バイタリティがないと言ったところで僕の活動範囲がそれを否定する。元々その気など欠片も持っていないけど、そもそも彼女達に口論で勝とうということ自体が不可能なのだ。口が回るだけじゃない、常にその言葉は二つになって僕を襲う。左から右からそれを聞いていると、どちらに反論していいのかわからなくなる。例えば彼女達の意見が別ったとしても、大抵の場合その二つ共に歴然とした意味があるのだ。

だから一番の有効策は、彼女達の機嫌を窺うというものだ。

「そうだね、僕は学校に居つきすぎだ。次からは気をつけるよ」

「そうなのです。気をつけるのです」

「もっと空と遊ぶのです」

空の発言で喧嘩になったのは言うまでもないが、結局それを収めるのも兄である僕の仕事だ。それが終わったのは、僕らの朝食が全てテーブルに並んだ頃だった。

「いただくのです」「いただくのです」

「いただきます」

「召し上がれ」

母の笑顔をと共に食事を開始すると、ようやく姉妹は僕の腕から離れた。しかし椅子を離すことはせず、僕らの食事はテーブルの上で混じってしまい、どれが誰の分だか判然としない。それが喧嘩の原因になることはわかりきっているのに、二人はそれを改めようとしないから、もう僕もそれを諦めてしまっていた。

今日の喧嘩の原因は、彼女達の大好きな緑色のフルーツだった。

「ついうい、よく見るとめろんがあるのです」

「なうー、おいしそうですねです」

「食後だからな。ちゃんとポテトサラダも食べてからにしないさ」

「うー、仕方ないのです」「なう、仕方ないのです」

嫌いなポテトサラダをちびちびと口に運ぶ姉妹を笑い、僕も嫌いなポテトサラダを口にした。相変わらず、このマヨネーズとじゃがいもの甘さがミスマッチだ。

それを食べ終わる頃、彼女達の機嫌は底辺寸でのところまで下降している。「一番好きな時間」を経てもそれなのだから、どれだけポテトサラダを嫌っているのかは容易に推し量ることができた。何故母はそれを出すのかと考えたが、特別な意味を見出したことはまだにない。

「うー、口の中が不愉快なのです」

「なう、ミルクティーがなかったら残してたのです」

残したら食後のメロンがなくなることとは、彼女達が一番よく知っている。

「うい、ではでは」

「なう、食べるのです」

目を輝かせてフォークを持った彼女達の視線の先に――三切れのメロン。それはそう、彼女達が嫌いなポテトサラダと格闘している内に僕のメロンも含めて入り混じってしまった結果だ。敢えてそれを正さなかったのは、僕も今気付いたから。

「……この一番大きいのが、きつと月のなのです」

「なうっ！ それは空のなのです！」

ほら、始まった。比較的左側にあるものを月、右側を空としておけば一番簡単だろうに、歴然としたその大きさが理性を溶かすのだ。ため息一つ、僕は主張した。

「それは、僕のだ」

大きな目をまん丸にして、姉妹は僕を見張った。次には慌てて、フォークでテーブルを叩く。

「ういっ！ 星の反乱なのです！」

「空達に反旗を翻したのです！」

そうさ、メロンは僕だって好物だ。好物？ いや、大好物だ。

この蕩けるような麗しい浅緑、そして口に入れると共に解けてしまふその食感、口の中を刺激するのは甘美な蜜——それは、至高のフルーツだった。

「空と月は普段から僕のデザートを取ってしまうだろう？ 今日くらいはいいじゃないか」

「うい、ういっ！ めろんは譲れないのです！」

「なのです！ 例え星だろうと、めろんは譲れないのです！」

姉妹喧嘩は数知れないが、兄妹喧嘩が起こるのは恐らくこの時ばかりだろう。我が家にあつて、メロンというものは特別な意味を持つていた。

それもそのはず、我が家は——いやこの世界では、メロンが一つたりとも収穫されることがないのだ。

気候、風土、その他色々な要因が絡まっっているとされているが、詳しいことはわかっていない。ただ「メロンが採れない」という事実のみが、この世界を支配していた。メロンのない世界にその概念が知れ渡ったのは、今から数十年前、多世界解釈がその論理を「事実」とした時だ。数多くの世界が見つかり、色々な文化が取り入れられた——音楽だったり美術だったり、それはそれはたくさんものを交易した。そして、一つの世界があつた。文明も何もかもが僕らの世界と似ていたそこは、どうしてか「季節」なるものがその気候に存在していた。僕らの世界とは違うその気候が、その至高の果物を生んだのだ。ということ、僕は学校で学んだ。

今では当たり前のよう取引されているそのメロンだが、一般の家庭に出回ることはずもない。それもそのはず、一つ取り寄せるのに莫大な費用がかかるその果物に、「一般」——高々大衆などが手を出せるはずもなかった。

僕らの家庭は裕福だ。メロンを取り寄せることもできる。でも、限界はあつた。兄妹の分をギリギリ揃えるのが精一杯という、なん

とも厄介な限界だった。

「うい、めろんは宝石よりも魅力的なのです」

「宝石などただの石ころに過ぎないのです。めろんの百分の一の価値もないのです」

「その分厄介では、あるけどね」

両親もその価値を理解しているから、僕らの争いを静観している。本当に価値あるものは、本当に強いものの手に渡って然るべきなのだ。

「じゃんけん？」

「そんな下らない遊びでは、めろんを貶めるのです」

「なう、めろんを馬鹿にしないのです」

それもそうか。宝石をじゃんけんを取り合ったら、世界はもっと平和な歴史を辿ってた。

「僕らはなんだい？」

「人間、なのです」

「それも、高等な人間なのです」

「そうさ。だから、それらしい方法が必要になる」

戦争などという野蛮な解決方法を選ぶわけもない。遊びで選んだらメロンに失礼だ。ならば――

「次の試験が一週間後に迫っている。月と空も同じはずだ」

「わかったのです」

「やってやるのです」

「ベストを尽くそう」

「猛勉強なのです」「猛勉強なのです」

僕らは母にメロンを冷蔵庫へ入れておくよう命じ、登校の準備へ走った。

両親は、そんな僕らをため息で見送ったのだった。

熟しすぎ――腐っていたメロンに絶望を覚えたのは、それから一週間後、僕が校内一位という好成績を収め、冷蔵庫を開けた時だっ

た。

それから次のメロンを取り寄せることになる一カ月後まで、僕は兄妹は立ち直ることができなかったそうだと。そんな事実すら、僕は自失していて自覚することができなかった。

絶望を覚えたのはこれが初めて——メロンは、至高の果物である以上に、魔性の果物だった。

（後書き）

変態ちゃうわっ

とか何とか、この姉妹を書いていると虚しくなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6498c/>

めろん。

2010年10月8日14時50分発行